



北海道然別湖周辺の風穴地帯とナキウサギ

2025 年 9 月の日本ジオパーク全国大会は北海道のほぼ中央にある十勝岳周辺で開催されました。それに伴い、然別湖周辺の地形と生物について野外研修に参加しましたので、ここに紹介したいと思います。

とかち鹿追ジオパークとその自然

広い北海道には現在6つのジオパークエリアがあり、それぞれ火山や化石といった特色のあるエリアがあります。とかち鹿追ジオパークは、北海道のほぼ中央の大雪山系の南に位置し（図1）、然別湖周辺の独特な地形と生態系が見どころのひとつです。

然別湖は大昔は川でしたが、約6～1万年前の火山活動で、川の流れを堰き止める形でいくつかの山ができ、天然のダム湖となりました（図2）。



図1. 北海道のジオパークの位置

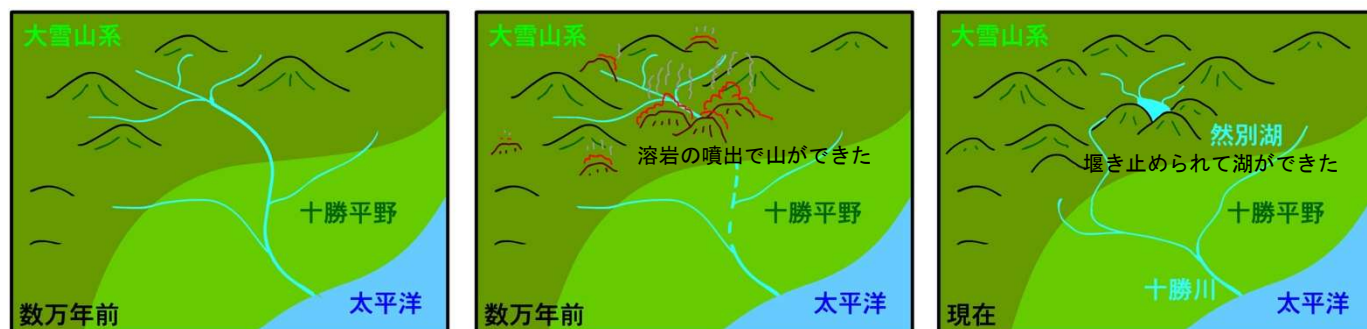


図2. 然別湖は火山で堰き止められてできた（とかち鹿追ジオパーク ビジターセンターの展示を参考に作図）

風穴地形と生態系

大雪山系の火山活動により、山々は溶岩が固まった岩石がゴロゴロしています。然別湖周辺の山は木々に覆われていますが、所々ゴロゴロした岩石が剥き出しになって、「ガレ場」となっています。山森の中は土壌が薄く堆積しているだけで、地面の下はゴロゴロとした岩となっていて、所々隙間があります。この隙間は空気の通り道となっており、「風穴」と呼ばれます。この空気は冬に低標高から高標高へ吹き抜け、風穴の内部がマイナス10℃まで下がります。春になって雪解け水が風穴に入り込み、そこで再び凍り、永久凍土となります。夏になると、空気は高標高から低標高へ吹き抜け、中の氷を通るので天然のクーラーとなります（図3）。

このように風穴地帯の地下は低温となるため、その周囲には通常はより高標高で見られるような苔や木々が生育できます。また、ガレ場地帯では、こうした環境にのみ生息するナキウサギが生息しています。

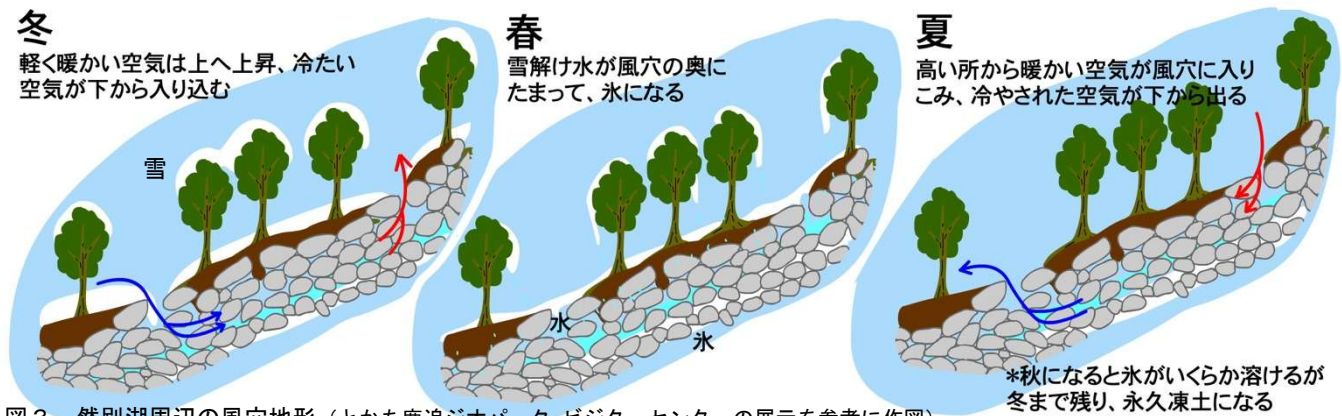


図3. 然別湖周辺の風穴地形（とち鹿追ジオパーク ビジターセンターの展示を参考に作図）

ナキウサギ

北海道に生息するナキウサギは、氷期に大陸から渡ってきて、北海道の山に取り残された種で、大陸のナキウサギの亜種「エゾナキウサギ」として区別されています（図4）。亜種とは、別種として区別できるほど大きな差異が認められるわけではないものの、「同一種内である程度の識別可能な違いが認められる集団」です。ナキウサギは、耳が短いので一見ウサギに見えないのですが、分類学的にウサギの仲間に入ります。名前にあるように「ピッピッ」と鳴き、姿が見えなくても鳴き声だけで生息していることが分かります。

図4. ガレ場上のナキウサギ
(長船裕紀氏より許可を得て借用)

氷期の生き残りであるように、ナキウサギは冷涼な場所にしか棲まず、天然のクーラーである風穴地帯以外では見つからないので、風穴地形の象徴的な動物と言えるでしょう。しかし、ナキウサギの生態や一生については、断片的なことしか分かっていません。一度特定の風穴に定住すると、一生その周囲で暮らし、穴の周囲の植物をあまり好みせず食べ、冬も冬眠せずに活動します。しかし、動物園などで飼育方法は確立されていません。

ナキウサギをめぐるトラブル

ナキウサギは、最近ではシマエナガ、エゾモンガとともに、北海道の3大かわいい動物とされ、野生下でしか見ることができません。そのため、然別湖周辺の山には、カメラマンや登山客が毎年多く訪れます。特に道路から近い登山道沿いにあるガレ場は、アクセスのしやすさからカメラマンと三脚がずらりと並びます。混雑するようになり、カメラマン同士や登山客のトラブルになることもあるようです。また、周囲の植物を踏み固められて、植物が生えなくなるといったこともあり、問題にもなっているようです。

ジオパーク関係者は、柵を設け、注意事項を貼るなどの対応をしています。有名になった後のジオサイトは、しばしばオーバーツーリズムによる問題が生じます。管理運営について、日本ジオパークの全国大会の分科会で議論が行われました。参加者からは、入山の規制、観察時間の設定や、年毎に活用するエリアを変えるなどのアイデアが出ました。一方で、分からない生態が多いナキウサギをどう保全していくかの調査も必要で、こうしたことを観察者に周知していくことも大事という意見もありました。このように、とち鹿追ジオパークでは、そこにしかない地形、生態系、動物と人との関係、それらをどう保全していくか、を考えさせられました。（小矢野）

イベント

1/31（土） 9:30～12:00 弁当パック地形模型を作ろう（1/17らか受付開始）
2/1（日） 9:30～12:00 チリメンモンスターを探そう（1/18から受付開始）

詳細は
こちら！

